

教育・研究における日本語と英語の往還——個性輝く国際化のために

講座名	日本語と英語の往還		担当者氏名	小笠原 正明	
講座コード	1901・1902	日時	2019年8月23日	教室	同志社大学至誠館
<p>〔講座の概要〕</p> <p>『大学教育学会誌』に論文を投稿するときは英語のアブストラクトを添付しなければなりません。研究以外の業務でも英語への転換が必要な場面が多く、研究者に限らず英語を自由に使うことが仕事の上で必要とされるようになりました。従来、英語は英語として学習することが推奨され、英語を母国語のように使うことが到達目標とされてきました。しかし、言語はそれを育んだ文化と密接な関係があり、そこまで含めるとこの目標は現実的ではありません。例えば、アメリカ人は米語で話し、イギリス人はブリティッシュ英語で話しますが、その間には相当な違いがあります。母国語のように使うためにはどちらかの文化に通じなければならず、結局、当該国に住んでみなければ身につかないということになります。</p> <p>現在、国際的に活躍している非英語国民には、自分の母国語とその背景にある文化を巧みに英語化し、それを個性として活かしている人が多いように思います。世界の多くの人が英語を使えるようになったことについては、1950年代にアメリカで成立した「学術英語 (Academic English)」の果たした役割が大きい、と放送大学の宮本陽一郎教授は指摘しています (2016)。修得すべきは、さまざまな文化に紐付けされた米語や英語ではなく、人工言語としての学術英語です。「英語」を母国語のように使いこなすのと違って、「学術英語」の到達目標は多くの人の手が届く範囲にあります。自然科学などのディシプリンでは、学生のころから母国語と学術英語との関係性を理解し、一方から一方への転換のルールを身につけるための訓練がなされています。専門への関門でもありますので、それを突破するためのノウハウも蓄積されています。</p> <p>本講座では、<u>科学英語の枠を超えて</u>、日本語と英語の往還の体験をし、そのルールを理解してもらいたいと思っています。パラグラフライティングや冗長 (Redundant) 表現の見分け方など、学術英語の基本的要素を学んだ上で、同様のことが日本語表現にあてはまるかどうか、具体的な例にもとづいて実践的に検討してみましよう。</p> <p>*参照してもらいたい文献 (ひろい読み程度で結構です)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「学術英語」について：宮本陽一郎 2016, 『アトミックメロドラマ』彩流社 (終章) ・パラグラフライティングについて：小笠原正明・細川敏幸・米山輝子, 2004, 『化学実験における測定とデータ分析の基本』東京化学同人 (8章) ・技術英語について：Matt Young 著、小笠原正明訳 1993, 『テクニカル・ライティング—話し言葉で書く科学英語』丸善. <p>〔タイムテーブル〕参加者数その他によって変更される可能性があります。</p> <p>9:00～10:30 パラグラフライティング等学術英語の基本と日本語との関係</p> <p>10:45～12:00 実践訓練：エレベーターピッチ、言語化ゲーム、「言葉の節約と俳句」等</p> <p>〔目標〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 学術英語の基礎を分析しその実用性とともに関心にある考え方を理解する。 ● 日本語と学術英語の構造的な違いを理解し、転換のためのスキルを身につける 					